

徐訏と朝吹登水子

杉村 安幾子

はじめに

作家徐訏（一九〇八—一九八〇）は、中国本国において「一九四〇年代の抗日戦争後期、中国文壇で一時は飛ぶ鳥を落とす勢いでありながら、その後完全に活動の消息の絶たれてしまった作家が数人いる。彼らの名を挙げてみよう。錢鍾書・徐訏・張愛玲・無名氏だ」^{〔1〕}のように紹介されている。現在では、中国において『徐訏文集』全十六巻が上海三聯書店から刊行されているほか、香港や台湾でも徐訏に関する全集や研究専門書が刊行されており、張愛玲と錢鍾書ほどではないにせよ研究の蓄積も進んでいる。一方、日本における紹介はわずか専論三篇にとどまり^{〔2〕}、作品の邦訳はまだない。

徐訏の経歴に関する詳細な紹介及び個別の作品分析は

別稿に譲るとして、本稿では徐訏とある日本人女性との関わりについて紹介し、それが徐訏の作品に及ぼした影響を考察してみたい。

徐訏と代表作『風蕭蕭』

徐訏は浙江省慈溪出身、一九三一年に北京大学哲学系を卒業後、同大で助教を務めながら心理学系の修士課程で学んだ。その頃から創作を始め、林語堂主編の『論語』月刊に投稿したり、又林語堂の創刊した『人間世』月刊の編集を務めたりもしている。一九三五年に趙璉との結婚を経、一九三六年秋に渡仏。パリ大学（ソルボンヌ）に籍を置いて留学生活を開始した。^{〔3〕}

一九三七年一月、『宇宙風』第三十二期・三十三期中編小説「鬼恋」を発表し、上海文壇で名を挙げる。

一九三七年七月の盧溝橋事件に端を発する中日戦争の勃発を受け、翌年帰国。続々と小説を世に問い、人気作家となっていく、出世作の「鬼恋」のタイトルにかけて「鬼才」とまで称された。徐訐の名を更に高からしめたのは、一九四三年三月から重慶の『掃蕩報』副刊で連載を開始した長編小説『風蕭蕭』であった。翌四四年には成都東方書店が単行本化、二年のうちに五版を重ねた。この爆発的人気によって、一九四三年は「徐訐年」と呼ばれている。

『風蕭蕭』のタイトルは『史記』『刺客列伝』第二十六の有名な一段、荊軻が始皇帝暗殺のために出立する際に歌った「風蕭蕭として易水寒く、壮士一たび去らば復た^{かえ}び還らず」から取られている。作中、上海を舞台に様々な国籍の美男美女が登場するものの、彼らの多くが強い愛国心に基づく諜報活動をしており、主要人物の一人である美人ダンサー白蘋が命を賭した諜報活動の後に殺害されてしまう件や、白蘋の死後、主人公の青年が内地に旅立つという展開を受け、使命を帯びた者の心境を反映したタイトルであると考えられる。上海という国際都市、洋館やナイトクラブやカフェという西欧の香りのす

る舞台装置、国籍の異なる美男美女、誰が敵で誰が味方が容易にはわからない人間関係、先の読めない起伏のある展開というように、『風蕭蕭』は通俗娯楽大作の要素に満ちている。徐訐がこの『風蕭蕭』によって人気作家になったにもかかわらず、「完全に音沙汰のなくなってしまう」状態に陥ったのは、建国後の中国の文芸路線に彼の「通俗」性が合わなかったゆえと言うことも出来るが、この点に関する議論は慎重を要するため、稿を改めたい。ただ、『風蕭蕭』の人気を支えたのが単なる通俗性だけではなく、一九四三年という連載期間、重慶の『掃蕩報』副刊という連載媒体に鑑みて、中日戦争を背景とした愛国心・民族心の高揚にも一役買ったことは間違いないと指摘しておく必要があるだろう。

『風蕭蕭』は徐という青年の一人称で語られる小説である。徐姓と哲学研究が本業であるという二点から、作者徐訐自身がモデルであろうと思われる。徐青年はとりあえず主人公ではあるが、誠実で心優しいという性格的美点以外、特に挙げるべき活躍はなく、他の美男美女諜報員の派手で壮絶な生き死にを目に焼き付け、それを語る役割が担わされている。その意味から言えば、既述の

ナイトクラブの美人ダンサー白蘋と、母親がアメリカ人で父親が中国人、日本で育った長身美貌の「社交界の花」梅瀛子の存在感が圧倒的であり、彼女達二人が実質的主人公と言って差し支えない。

本作の最大の盛り上がりは、白蘋の死である。彼女は、明記されてはいないものの日本を指すと思われる敵方の諜報員に殺害されてしまうのである。才気煥発で気が強く、思いやりのある人情家として描かれる白蘋の死は、徐青年は固より作中人物の多くに衝撃を与え、なかなしく梅瀛子が白蘋の弔い合戦と言わんばかりに、悲しみを堪えて復讐戦へ乗り出していく様が作品後半の山場である。

さて、白蘋を死に迫いやる日本側の諜報員は、本名を郎第儀といい、宮間美子と名乗る一見おしとやかな日本女性として登場する。彼女は作中、秋雨三郎の名で男装をして満洲で暗躍したとも紹介され、川島芳子をモデルにしたとも考えられる設定である。彼女と徐の会話シーンをみてみよう。仮面舞踏会の夜、徐が白蘋と梅瀛子に頼まれて暗闇の中で諜報活動をした際、妨害工作をした女がおり、徐は相手に気付かれぬようにこっそり相手の

ドレスにインクの染みを付ける。舞踏会に戻り、インクの染みのある女を見付けダンスをするくだりである。

「お嬢さん、私達が前にも一緒に踊ったことを憶えておいですか？」

「いいえ」彼女は答えた。「これが初めてだと思いませんけど」

「それなら私には、あなたにご芳名をお尋ねする権利があるということですね？」

「朝村登水子と申します」彼女は笑って答えた。

「なんとという美しいお名前だ！」^①

この時点で徐は、仮面を付けた相手の女性の顔を確認できずにいるが、すぐに日本人商人の本佐次郎の口から、以前会ったことのある宮間美子であると知る。徐は「何故、彼女は朝村登水子などと名乗ったのか」と訝しがる。

パリ留学中の出逢い

日本人の名として「朝村登水子」は特に不自然なものではない。しかし、この名は徐訏が適当に思い付いて登場人物に付した名前ではなかった。

一九三七年十二月、ソルボンヌに留学中の徐訐は、一人の日本人留学生の少女に出逢う。彼女こそ後にフランソワーズ・サガン『悲しみよこんにちは』（新潮文庫、一九五五年）の邦訳で一躍有名になるフランス文学の翻訳家、朝吹登水子（一九一七—二〇〇五）であつた。朝吹は一九三六年に渡仏、女学校を経てソルボンヌで学んでいたのである。サガンの他、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、ジャン・ポール・サルトルの翻訳でも知られている朝吹は、『愛のむこう側』という自伝的小説も著している。この『愛のむこう側』には、徐訐がモデルと思しき中国人青年兪が登場する。朝吹自身をモデルとしたヒロイン紀川紗良と兪の出逢いを見てみよう。

紗良がキャフェの中からサン・ミッシェル大通りを往き交う人たちをぼんやり眺めている時、ふと自分のテーブルの前に人が立つ気配を感じた。背の高い東洋の青年がベレーをかぶって立っていた。

「失礼ですが坐つてもいいでしょうか？ ぼくは心理学の教室でいっしょでした」

二重瞼の、頬骨の高いその青年は微笑もせず紗良を無表情にみつめた。紗良は一瞬躊躇した。正面

にいる青年はあきらかにシナ人だった。（中略）

「ぼくは北京大学を出て、パリに勉強に来ているんです。フランス文学を……あなたは何の勉強ですか？」^⑤

『愛のむこう側』はあくまで自伝的小説であり、主人公紗良の経歴の細部に亘る全てが作者朝吹自身の経歴と完全に一致する訳ではない。しかし、この引用中の兪の経歴は徐訐のものに合致する。後、一九七八年に徐訐が東京で開催されたペンクラブに出席した際、朝吹に再会し、『愛のむこう側』の読後に「兪」が自身であると認めたという。^⑥

紗良は日本の中国大陆侵攻を思い出し、中国青年との会話に気まずさと後ろめたさを感じるが、兪は洒脱且つ自然な態度で紗良に接する。兪はフランス語が堪能で、ソルボンヌでは社会学や心理学、文学などの講義を聴講しているのであつた。

紗良と兪の再会は、次の週の社会学の教室においてである。講義終了後、紗良とお茶を飲みながら兪は、戦争状態にある祖国に思いを馳せ、帰国しようか迷っている旨を語る。そして、「憎悪する軍国日本だけれど……で

も貴女は素晴らしい」と述べ、紗良への好意を表す。

その後、兪が紗良の下宿先を訪問し、二人で日本の軍国主義を批判するなどして語り合うが、四度目の対面は早くも別れとなる。明日帰国する決意をしたので、会ってお別れをしたいというメモを貰い、紗良はシテ・ユニヴェルシテール駅へ兪に会いに行く。兪は明日出発し、マルセイユ出帆の船で中国に戻り、重慶に行くのだと告げ、突如紗良に求婚する。

「サウ、ぼくと結婚して重慶に来てください。お願いです。お願いです。ぼくは貴女をおいてパリを去ることはできない!」

兪は叫ぶように言った。

紗良はびっくりして自分の耳を疑った。

「まさか……。兪、私がいま重慶に行くなんて不可能だと知っているでしょう? 私は日本人よ。日本と貴方の国は戦争しているんじゃないの。貴方は抗日戦線に参加するために帰るのでしょうか? そんなこと、不可能じゃないの」

兪は慟哭し、通りの真ん中で紗良の足元に跪くが、兪が激情的になればなるほど紗良は冷静になり、「兪、あ

なたは私の大切なお友達よ」と告げ、「女性の逃げ口上の常套句」に「つかのまの友情への感謝」を籠める。

「但だ願はくは夜悄悄として、夢裏に君容に会はんことを」

徐訏の朝吹への心情が果たして本当に『愛のむこう側』に見られる兪の紗良への片恋のようなものであったかについては、自伝的小説ゆえに一旦保留しておこう。徐訏は既述の通り一九三五年に恋愛結婚をしており、渡仏後間もない頃、妻趙璉が息子徐尹秋を連れてパリを訪ねている。尤もタイミング悪く、徐訏は入れ違いにイギリスへ旅行に出てしまっており、趙璉母子は徐訏に会うことなく帰国する。そして、徐訏と趙璉は一九四一年に協議離婚をしている。

他方、『愛のむこう側』では、ヒロイン紗良は十六歳で一度結婚しており、離婚後にパリ留学をしているさまが描かれるが、これは朝吹登水子自身の経歴に沿ったものである。

『愛のむこう側』は、国籍の様々な男性登場人物の多くが次々に紗良を好きになるという展開なのであるが、

その中で俞とのエピソードは、読み手にとりわけ強い印象を与える。それは俞との出逢いが、日本の中国侵略と戦争を背景として、紗良に戦争や侵略、民族や人種について深く考えさせる重要な契機となつてゐるからである。紗良はその後、より一層思考を深めていき、男女の不平等や日本人女性の日本社会における地位の低さを痛感し、平和を心から希求するようになる。そうした紗良の思想的成長は、結果として『愛のむこう側』を「単なる名家のお嬢さまのフランス留学記及びパリでのロマンス報告記」に墮することのない、少女の成長物語にしている。

徐訐は俞同様、ソルボンヌでの学業を途中で放棄し、一九三八年の年明けにパリを去る。『愛のむこう側』において紗良は、一月にインド洋でしたためられた、上海の消印のある書信を俞から受け取る。それは二ページに亘る恋の詩であつた。「悠悠故郷遠、滾滾海水長、別君如離日、從此天無光。（悠悠として故郷遠く、滾滾として海水長し、君に別れること日に離るるが如く、此れ従り天光無し）」で始まるこの詩は虚構ではなく、徐訐が実際に朝吹に寄せたものであり、「T・Sに寄す」と題

され徐訐の『待緑集』（台北・正中書局、一九六九年）に収録されている。この詩の第十一から十四句「君有眼如月、君有唇若虹、纏綿君如蚕、靈活君若龍。（君眼月の如き有り、君唇虹の若き有り、纏綿として君蚕の如く、靈活として君龍の若し）」、第十九・二十句「但願夜悄悄、夢裏會君容。（但だ願はくは夜悄悄として、夢裏に君容に会はんことを）」を受けると、徐訐の朝吹への恋愛感情が詩中に表出していることは、やはり否定し得ないように思われる。しかしながら徐訐自身は生前、パリにおける片恋を、相手を特定して文字化することにはなかつた。

『愛のむこう側』では、次のような一段で紗良と俞との交流に終止符が打たれる。

「默默望蒼天 唯祝會面早」と結んだ句を読みながら、おそらく俞と再会することはないだろう、と紗良は思うのだつた。

そして、紗良が俞を思い出すのは、日本帰国後、志賀高原で出逢つた通信社の記者アンリ・フォレスチエが、紗良に愛を表明しながらインドシナに行かねばならないと告げた時である。

あのバリの初冬、大都市の駅の前の往来の街燈の下で見た兪のゆがんだ顔が紗良の脳裡に浮んだ。生身の青年たち、彼らは突然眼前から幻影のように消えていく。もうすでに血の通っていない幻のよう

に。
紗良はここで、兪やアンリら戦地に赴く青年達が生きて戻って来ないことを想定している。特に後半二文は、彼らが自身の前から去り、死への道を歩んでいくようにとらえられている。こうした別れが、紗良の平和を求める気持ちをより一層強めていくことになるのだが、兪は既に紗良の人生の中から去り、消えていったことになり、それは紗良において兪の比喩的な死を意味していると言えるのではないだろうか。

「宮間美子毒殺事件」

前述のように、『風蕭蕭』には次から次へと国籍の様々な美男美女が登場する。その多くは語り手である徐と何らかの交流があり、社会的立場や性格が一定程度明らかにされるのであるが、徐とダンスをした際に「朝村登水子」と名乗る日本の女スパイ宮間美子は、徐の目を惹き、

印象を残しながらも、謎めいた雰囲気のまま終始する。

私は彼女の着物の衿から、これこそ絵画の中の日本人美人そのものだと感じた。しかし、顔立ちは完全に子供の活発さを表しており、古典的な雰囲気は決して濃くなかった。(中略) 私が彼女の眼に注目すると、睫毛は長かったが、眼は永遠に視線を下に向けているかのようで、その印象はまさにカメラマンが人物写真の眼球に反射した光を修正してしまった多くの写真が私に与える印象と同様、一種物静かで、少し神秘的であるとも言える。

宮間美子は「深窓の令嬢」らしく、英語も中国語もあり得意でないように描かれる。実際は、後に明らかにされるように女スパイとして、徐の諜報活動を阻害するのも彼女であり、白蘋を死に追いやるのも彼女の差し金であった。しかし、作中の登場回数はごく少なく、その割には容姿や雰囲気の写真が丁寧で細かいという些かアンバランスな人物である。また、そもそも徐と宮間美子がダンスをしたのが仮面舞踏会時であることを考えれば、問われたからと言って彼女が名を名乗る必要などない。仮面舞踏会では「朝村登水子」と名乗られるものの、

その後宮間美子がその名を用いることはないため、「朝村登水子」という名は作中、少し宙に浮いたような唐突の感は免れない。更に言えば、彼女は白蘋を死に至らしめた人物でありながら、徐の眼の中ではそのような「憎むべき敵」としては全く描かれていない。ここに徐訐の「朝村登水子」と名乗る日本側諜報員女性へのある思い入れを指摘できるのではないだろうか。徐訐はパリで出会い、強く心惹かれた朝吹登水子から名を借り、日本側の美人スパイに冠したのである。

徐訐と朝吹登水子のパリでの出会いについては、徐訐の伝記に明確な言及がある。また三回結婚した他、恋愛関係にあった女性が多数いたとされる徐訐のロマンスを紹介した記事などにも必ず朝吹の名は挙げられる。しかし、『風蕭蕭』の「朝村登水子」が朝吹の名から取られているという指摘はない。『風蕭蕭』における「朝村登水子」という名の唐突さは、当然作中に一種の違和感をもたらしているのであるが、その唐突さにはやはり徐訐の朝吹への恋愛感情及び失恋したことへの傷心が投影されているのを見て取れるだろう。

『風蕭蕭』において白蘋の死後、白蘋の仇は自分一人

で打つと告げた梅瀛子とも別れた徐はある日、次のような新聞記事に衝撃を受ける。「宮間美子毒殺さる／原因究明するすべなし／犯人については捜査中」徐はそれを梅瀛子の所業だと確信する。同時に又、白蘋の死は宮間美子の差配によるものだったとも知り、内地へ向かう決意をする。

宮間美子、即ち「朝村登水子」は、『風蕭蕭』において殺されるのであるが、それは徐訐にとってパリでのつらい片恋との訣別を意味していたのではないだろうか。作中で朝村登水子を殺すことが、自身を振ったゆえに徐訐の心に強く残っていた朝吹の影を追い払うことにつながった、と深読みすることができないだろうか。『愛のむこう側』における兪と『風蕭蕭』における朝村登水子。朝吹登水子と徐訐の二人は、自身の小説中に期せずしてお互いをモデルとした人物を登場させた。朝吹は兪を戦争や民族について深く考察する導因として描き、他方徐訐は朝村登水子を徐が強い絆で結ばれた白蘋・梅瀛子と別れて一人後方の内地へ向かう導因として描いた。そして、兪は比喩的に、朝村登水子は現実的に死に、それが朝吹と徐訐において互いの存在との決定的な別れとなっ

たのである。

おわりに

徐訐の代表作として、『風蕭蕭』は詳細に論じられる必要がある。特に一九四〇年代文学の観点からは、徐訐論だけでなく、戦争との関わりや読者論、「通俗とは何か」という問題とも相俟って、よりマクロな視点で作品をとらえることになるだろう。

本稿では『風蕭蕭』中の完全に脇役である登場人物の一人を取り出し、敢えて徐訐の伝記の中のごく個人的なエピソードを紹介した。徐訐は『風蕭蕭』の後記で「この本の物語はフィクションであり、人物は更に想像の産物である。(中略)もし知っている事柄或いは知り合いの人物を、本書中の物語や人物にこじつける人がいたら、それは完全に神経過敏というものだ」と述べている。確かに「朝村登水子」は、名前こそよく似ているものの、『愛のむこう側』の爺のように朝吹登水子が完全なモデルであるとは言えないかもしれない。しかし、徐訐が他の名ではなく「朝村登水子」を用いたという事実は、紛れもなくその背後に彼の朝吹登水子への片恋と失恋が

あることを物語っている。文学作品が白紙から生まれるものなどではなく、作家自身の個人的体験や感慨が基盤となっていることを判然と示す例だとも言えるだろう。『風蕭蕭』は、作家徐訐を作り上げた大きな因子でもあるパリ留学時代や恋愛譚が支えているのである。

本稿が『風蕭蕭』の作品理解や分析に寄与する所は大きくない。翻って、戦争中にパリで出逢った二人の若者が、交流期間は極めて短かったにせよ、後に作家徐訐と朝吹登水子としてそれぞれの国で小説を著し、互いをモデル或いは彷彿とさせる人物として作品中に描き込んだことは、日中双方の文学が期せずして交差した奇縁とも呼び得る瞬間であった。

注

- (1) 李偉著『神秘的無名氏』上海書店出版社、一九七八年。
- (2) 新開高明「徐訐について」(『防衛大学校紀要』第廿六輯、昭和四十八年三月)、勳儲「徐訐研究ノート——研究の現状、作風及びその生涯」(『日本アジア言語文化研究』第七号、大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、二〇〇〇年三月)、夏嵐・森賀一恵・磯部祐子「徐訐の

話劇について」(『富山大学人文学部紀要』第五十六号、

二〇二二年二月)。

(3) 徐訐の経歴については主に呉義勤・王素霞著『我心彷徨——徐訐伝』(上海三聯書店、二〇〇八年)に拠る。

(4) 徐訐『風蕭蕭』、『徐訐文集』第一巻・小説、上海三聯書店、二〇〇八年十月。以後、本稿における引用は全て本テキストに拠り、拙訳を付す。

(5) 朝吹登水子著『愛のむこう側』新潮文庫、昭和五十八年。以後、本稿における引用は全て本テキストに拠る。単行本初版は新潮社、昭和五十二年三月。中国語訳は、王玉琢訳『愛的彼岸』湖南人民出版社、一九八七年。

(6) 注(3)前掲書。

(7) 中村真一郎は『愛のむこう側』(注(5)前掲書)の巻末解説において、本書を「明治以来の小説の歴史のなかで」、「支配階級に育った人物によって書かれた最初の作品」と称している。

(8) 「T・S」は注(3)前掲書によれば「TOMIKO SAN」の略。

(9) 徐訐『風蕭蕭』初版後記、『徐訐文集』第十巻・散文、上海三聯書店、二〇〇八年十月。

【附記】 本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた挑戦的萌芽研究「中国現代文学における通俗小説——Xu・Wumingshiを中心に」(課題番号15K12869)による研究成果の一部である。